

相関基礎科学系

系長 菅原 正



ご存知のように、我々を取り巻く自然界は素粒子，原子核，原子，分子，凝縮体，高次構造体，生命体，・・・といった階層構造から成り立っています。自然界の諸現象を深く理解し，生態環境を維持しつつ人間生活を豊かにして行くには，個々の階層に特有な現象だけでなく，それらを貫く普遍的な構造や原理を解明することが不可欠です。さらに，自然科学研究の社会や歴史における役割を探求し，明確にすることもまた，広い意味での現代科学の重要な課題といえるでしょう。このように基礎科学の各分野が，近接分野との相関を保ちつつ進展していくことの重要性は自明ですが，ますます個別細分化していく傾向の強い現代科学の潮流の中にあっては，基礎科学の総合性を追究することは容易なことではありません。相関基礎科学系は1995年の発足以来，21世紀の科学に求められている「広い視野の下に専門性を深める」という方向性を掲げ，研究・教育を行ってきました。本系は，現在教授24名，助教授21名，講師1名，助手28名から構成されており，これまでに修士346名，博士111名（論文博士を含め134名）を送り出しています。

ところで，ここでいう「総合性」とは単に「既存分野」の寄せ集めで達成されるものではありません。自分の専門分野を一心不乱に研究していて，ある段階に到達した時，自分の見出した現象が，あたかも鉤脈を掘り当てたかのように，他の分野の基盤と相通ずることに，突然気付くことがあります。また，専門分野の本流とは外れていると思いつつも，止むに止まれぬ好奇心から始めた研究が，ある時期になって，にわかにならぬ近接する学問分野の研究者の興味を引き，効果的な共同研究の結果，続々と新事実が発見されるという醍醐味を味わうこともあるでしょう。我々の目指す総合性とはまさに，このように新たな学問領域が創出されるダイナミクスそのものを指すのだと，私は思います。

この頃，私は自然科学の知識を増やし，理解を深めていく過程は，「螺旋階段を登るほど段々に，見晴らしがよくなるようなものではないか」，と思うようになりました。前だけを見て，一本道をひたすら登っていくのではなく，螺旋状に登っていくと，一度反対側に回ってから元の方向に戻って上がっていく行程を繰り返すこととなります。つまり正面から見据えている課題と一見関連がないような分野の話や話を聞く，勉強をする，その後にもまた本来のテーマに戻ってくる。すると，急に見方の幅が広がり，新しい発見につながる場合があります。その時，まさに自然科学研究をする醍醐味に触れ，鳥肌が立つぐらいの興奮を味わうことができるでしょう。相関基礎科学系は，広く異なる専門分野をもつ著名な先生方，優秀な先輩が大勢居られますので，素敵な風景に出会うには最適の空間といえます。

以上述べたことからおわかりのように，相関基礎科学系の特色は，各専門分野間の垣根が低く，自由闊達な研究・教育環境が整っているところにあります。このことこそが，日本の自然科学研究の独創性を育む上で，最も有効であることを，最後に指摘しておきたいと思います。